

10月4日（日）主日礼拝レジュメ

「クリスチャンとしての生きる道」 テサロニケ人への手紙第一 5章 16～18節

テサロニケに、パウロは第二回の伝道旅行で訪れた。使徒の働き 16章を見ると、パウロはピリピで伝道していたが、占いの霊につかれた若い女奴隷から占いの霊を追い出し、儲ける望みがなくなった主人から逆恨みをされ、訴えられて投獄された。しかし釈放され、その後、テサロニケに行った。ユダヤ人の会堂で三回の安息日にわたって聖書に基づいて論じる中で、神を敬う大勢のギリシャ人たちや、かなりの数の有力な婦人たちも納得し、信じてパウロとシラスに従った。しかし、ユダヤ人の共同体は、かなりの数の支持者を失うことがおもしろくなかったのか、彼らは暴力に訴え、ならず者を誘い込んでパウロをもてなしたヤソンの家を襲い、世界中を騒がせてきた者に宿を提供し、パウロはイエスという別の王がいると言って、ローマ皇帝の詔勅に背く行いをしていると町の役人に訴えた。そのように信仰に反対する者たちがいて、2章 14節にも「彼らがユダヤ人たちに苦しめられたように、あなたがたも自分の同胞に苦しめられたからです。」とあるのは、そのようなことを指している。教会の内部にも様々な問題があり、始まったばかりで熱心ではあっても、なお教えられる必要のある不完全な教会が生き抜こうとした時に自ずから遭遇した種々の困難があったことは想像できる。その中であってパウロはテサロニケ教会のクリスチャンたちに「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべてのことにおいて感謝しなさい。」と勧めていて、パウロは、これこそがキリスト者の生き方だとでも言っているかのようだ。それは決して生活環境によって左右されない生き方、むしろ生活環境に逆らって生きる生き方とでも言うべきものだ。私たちが目指すべきは、このような生き方。

「いつも喜んでいなさい。」とあるが、苦難の中にあっても喜ぶことはできるし、苦難と喜びは両立できることをパウロが、身をもって証ししている。この喜びは、言わば主イエス・キリストにある喜び。その特徴は、何ものによっても奪い取られることがないということ。なぜならイエス様ご自身が、

ヨハネの福音書 16章 22節で「その喜びをあなたがたから奪い去る者はありません。」と言われたから。

ガラテヤ人への手紙 5章 22節に「御霊の実は、愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制です。」とありますように、喜びもその一つ。御霊は私たちのうちに住んでおられて、その御霊が私たちに喜びを与えてくださる。

「絶えず祈りなさい。」については、さまざまな解釈がなされている。その中で「絶えず祈りなさい。」とは、絶えず自分の無力さをおぼえて、神の力に頼るために、神に目を向けるようにということではないか。神に頼らなければ自分は生きていけないと思った時に、それが祈りとなる。言葉を換えれば、祈りとはただ神に頼るということ。神はあえて私たちにそのようなところを通されることもある。それは、私たちの思いを神に向けさせ、神にゆだね、確かに神がともにいてくださることを感謝させるため。

さらに、祈りは神との交わり。祈りとは、人格を持つ神の愛から来るその親密な交わりに入れられること。「絶えず祈りなさい。」との勧めは、この神との豊かな交わりに入れられることを勧めることばのように思える。

「すべてのことにおいて感謝しなさい。」とあるが、感謝できることもあり、感謝できないこともある。しかし、神は目的をもって、みこころにより私たちを常に導いておられる。喜ばしく思えない出来事の中にあっても、神は愛をもって私たちを導こうとしておられると信じることができないか。そのように私たちが信じることができるようになる時、すべてのことの中に主の御手を認める時に、私たちはすべてのことにおいて感謝できるようになる。

「これが、キリスト・イエスにあって神があなたがたに望んでおられることです。」これが、神が私たちに望んでおられる生き方であり、このように生きることが神のみこころであり、もし私たちが、このように生きようとするなら、必ず神が力を与えて、このような生き方ができるようになる。